アイヌ民族 ありのままに

札幌出身 イタリア在住の写真家

西川よしえ

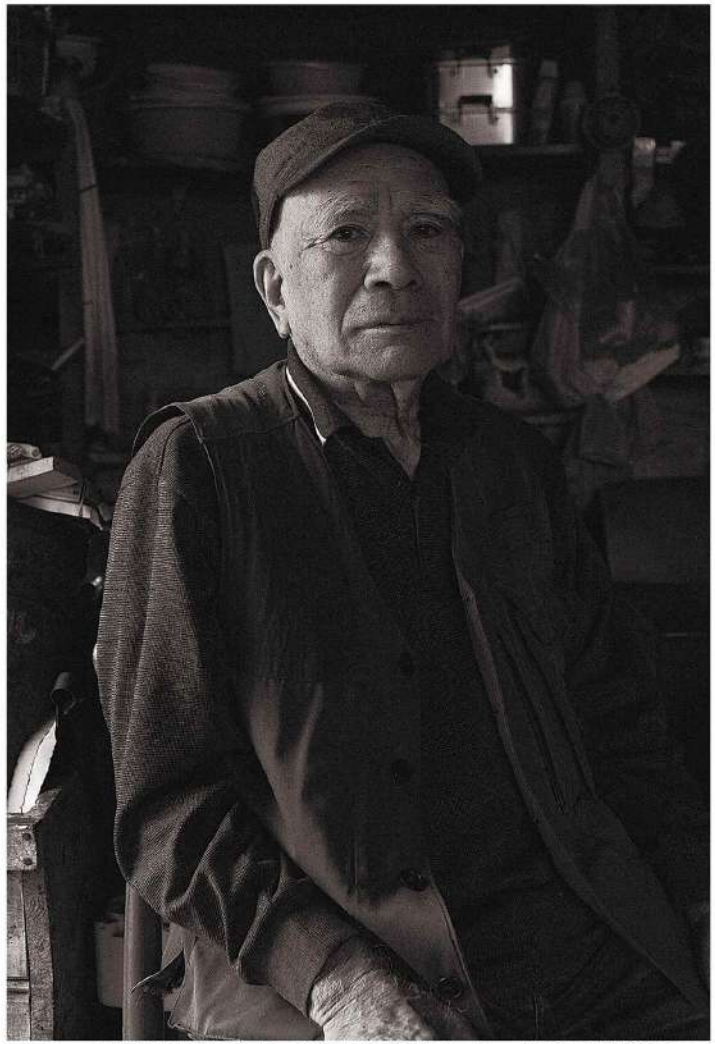
「北海道の誇る文化」

札幌出身、イタリア在住の写真家西川よしえ(62)。長年ファッション誌などで活躍してきたが、近年はアイヌ文化の発信に力を入れている。札幌でこの夏開かれた企画展「アイヌの伝承者　浦川太八、80歳」では、日高管内浦河町の浦川太八が作った工芸品などとともに、彼を撮影した作品を並べた。西川がアイヌ民族に密着し、シャッターを切る理由は何なのか―。その思いと抱負を聞いた。

（山中龍之助）

アイヌ文化発信への思いを語る西川よしえ（石川崇子撮影）

にしかわ・よしえ　1959年生まれ。札幌大谷短大芸術学部美術科卒業後、米・サンフランシスコで写真を学んだ。84年、東京に事務所を構え、広告写真などを撮影。96年にイタリアに渡ってからは人物、ジュエリー、風景など幅広い被写体を収めている。



西川よしえが撮影した、浦川太八のポートレート。「撮影した写真で唯一『レンズをのぞいてください』とお願いした1枚」という　©Yoshie Nishikawa

西川がカメラマンになったのは札幌市内の短大卒業後。ファッション誌の表紙撮影などの仕事を東京でした後、イタリアに渡った。

「カメラマンになろうと思ったのは、大学でいろいろな授業を受ける中、写真を撮ることが最も自分らしく表現できると感じたからです。22歳で札幌を出て米国で写真を学び、東京で個人事務所を構えて活動しました。ファッションの仕事をするうちに、世界の舞台で挑戦したいと考えるようになり、ミラノに行くことを決めました」

アイヌ文化に関心を持ったのは5年ほど前。ミラノ総領事館のパーティーで受けた一言がきっかけだった。

「『北海道出身です』と話すと、『ではアイヌ文化をよくご存じなんですね』と言われました。でも、それまでアイヌ文化には触れておらず、何も答えられませんでした。大英博物館などのパビリオンでは日本刀などと一緒にアイヌ工芸品も並んでおり、海外ではアイヌ文化は当たり前に受け止められています。なのに自分は詳しくない…と思ったことが、私とアイヌ文化との出合いでした」

西川はその後、知人を介してアイヌ民族を訪ね始めた。その中の一人が浦川だった。浦川は猟師、木彫家として活動。アイヌ文様を彫り込むマキリ（小刀）作りの匠として知られる。

「初めて会ったのは今年の春ごろです。浦川さんは自然とともに生きている方で、立ち居振る舞いも自然体。突然訪問した私を受け入れてくれる優しさがありました。7月にもう一度浦河町を訪ね、企画展用の写真を撮りました。浦川さんのありのままを収めようと、私から指示などはせず、息を潜めて私の存在が見えないように努めました」

企画展では、浦川が山に入る様子や工房で作業する日常の姿を捉えた写真を並べた。地元・北海道での作品展は初めてとなった。

「別の仕事でイタリアと日本を行き来しており、本当は今年2月にミラノに戻る予定でした。それが新型コロナウイルスの影響で延び延びになったことで、浦川さんとの出会いにつながりました。予定通り帰っていたら企画展は実現していません。ある意味『コロナに時間を与えられた』と感じています。コロナで大変な思いをされている方も多いですが、地元で作品展を開けたことは私にとって感無量です」

今回の企画展開催をステップに、海外でもアイヌ文化を発信したい考えだ。

「まだ具体的な見通しは立っていませんが、今回撮影した写真を世界の舞台でお披露目できれば。これからは、例えば、浦川さんの冬のシカ猟に同行し、まだ見たことのないアイヌ民族の暮らしを追ったりしてみたい。北海道の誇る文化を国外で見ていただくため、これからもシャッターを切り続けます」